

第 2 回学術総会会長挨拶

予防医学リスクマネジメント学の発展を願う

2004 年は日本予防医学リスクマネジメント学会 (JSRMPM) が 3 年目を迎える年であり、わが国における予防医学リスクマネジメント学の歩む方向をしっかりとしたものとするための礎を作ってゆくべき年である。2 月に福島県立医科大学にて第 2 回学術総会をお世話させていただき立場からすると、大会の内容がどのようなものとなるかが予防医学リスクマネジメント学の方向性を定めてゆく上で重要な意味を持つと考えられるので、任の重さにいささか緊張しているというのが正直な気持ちである。

私自身は精神医学の臨床研究者であるので、精神疾患や精神保健における発病予防や発病リスクマネジメントに関心がある。実際、うつ病や自殺の問題は市民的な関心も急速に高まっている精神保健の上での重要なリスクマネジメントの課題である。また、統合失調症など内因性精神疾患といわれてきた精神疾患の科学的な理解が進むとともに、その発病予防の課題も現実味を帯びて取り組まれるようになってきた。わが国でも 8 年前から精神障害予防研究会が発足して研究発表が行われるようになってきている。

私自身の関心はこのように限られた分野ということになるが、病院で働く臨床家という広い立場からしてみると、医療事故の予防という課題は既に多大な労力と時間を使って取り組まれるようになっており、私自身も正面から取り組まねばならない課題として迫ってきている。そしてこれは予防医学リスクマネジメント学が広がらねばならない根拠ともなっている。

ほとんどの臨床家は自分自身の受け持ち分野のリスクマネジメントに関心を持ちながら、同時に臨床家に普遍的に求められるリスクマネジメントに取り組むことを強制させられているといってもよいであろう。これは臨床家にとってしんどい作業である。予防医学リスクマネジメント学が発展・定着して、卒前医学教育の中に広く臨床に共通する部分の講義と実習が取り込まれるようになれば、こうした臨床家のしんどさは軽減するものと期待される。ここに JSRMPM が活動する意義があると思われるので、予防医学リスクマネジメント学が発展することを期待するのである。

2004 年 2 月 20-21 日の第 2 回 JSRMPM 学術総会では、個々の分野におけるリスクマネジメントの方法論について意見交換がなされることを期待すると同時に、予防医学リスクマネジメント学に共通する普遍的な原理と方法が深められると良いと思う。そのために、リスクマネジメント学の原理と方法を深める学際的なディスカッションの場を設けたいと考えている。おそらく今後しばらくの学術総会ではこうした努力が続けられる必要があるのではなかろうか。

また、個人的には精神疾患の発病予防に取り組んで実績のあるオーストラリアの Patrick McGorry 教授が特別講演されるので、精神医学個別の分野での精神障害発病予防というリスクマネジメント学の発展にとっても転機となればよいと期待している。

第 2 回学術総会 会長 丹羽 真一
福島県立医科大学医学部神経精神医学講座